

学 位 論 文 要 旨

氏 名 堀川 修平

題 目 日本の性教育実践における同性愛／同性愛者のとらえなおし
——“人間と性”教育研究協議会「同性愛プロジェクト」(1988-1991)
を担った教師たちのライフヒストリーに着目して——

本論文は、日本の性教育実践において同性愛／同性愛者がどのようにとらえられそれに関わり教師がどのように捉えなおされてきたのかを明らかにするために、1970年代から1990年代前半という時期におけるジェンダー・セクシュアリティに関わる歴史的背景と、その時代において性教育実践をした教師のライフヒストリーとに着目し、その実践内容そのものを明らかにしながら描き出した。

第Ⅰ部「性教育を担った教師たちが同性愛／同性愛者を捉えなおす以前の日本性教育の史的研究」(第1・2・3章)は、「同性愛プロジェクト」設立以前の日本性教育史における1970年代から1987年の「画期」までという時期区分の中で、性教育に関わる者たちがどのような同性愛／同性愛者観を持っていたのかを明らかにすること、第Ⅱ部「教師の捉えなおしを描くためのライフヒストリーへの着目」(第4・5・6・7・8章)は、第Ⅰ部でみた、性教育者たちによる同性愛／同性愛者へのまなざしが、どのように捉えなおされ、それがどのように性教育実践へと昇華されていくのかを、「画期」である1987年のアメリカ研修以降の動きを追って明らかにすることを作業内容とした。そして、第Ⅰ部、第Ⅱ部で明らかにしたことを、総括的に考察することを終章で行った。

まず「画期」以前の性教育における同性愛／同性愛者の捉えられ方を整理した。日本において、純潔教育を乗り越えるというねらいで1970年代以降に日本性教育協会によって推し進められた科学的な性教育実践では、その「科学」という名のもとにおいて、同性愛者を“異性愛者とは違う異常な人びと”というまなざしで取り扱っていた。また、民間教育研究団体である“人間と性”教育研究協議会(性教協)における性教育実践からも、JASE同様に、同性愛者側に問題があるというような視点が見られた。それは、“身近に同性愛者がいると思えない”という、教師の子ども観、そして、同性愛者を異常視する「科学」に基づいた性教育に対する信奉が存在していたためであろう。

ただし、教師や医者や学者が同性愛者を受け入れがたくとも、すでに社会には同性愛者は存在していた。日本においては、1970年代からレズビアンによる「若草の会」やゲイによる「IGA日本」などが立ち上げられていた。かれらによる組織は、社会において排除されてきた同性愛者という同志のための居場所として、そして学びの場へと変質していった。IGA日本や「れ組スタジオ・東京」などでは、かれら自身が社会において排除されていることへの気付き、そして排除されているという社会構造を問い直すための知識が学ばれていたであった。その後、1980年代がHIV/AIDSに関連してゲイへの排除が強まった時期であったことにも関連し、1980年代、90年代にかけて、IGA日本で学んだ若者たちが「アカー」を設立させ、行政やメディアに対して抗議活動を進めていったのだ。

このような状況下で、1987年に性教協において企画されたアメリカ性教育研修旅行で、参加者たちは、3つの衝撃的な出来事を経験している。それは、第1に、キン

ゼイ研究所でのマクイーター博士によるカミングアウトであり、第2に、サンフランシスコでの「脱感作」のフィルムであり、そして第3に、真昼のカストロ通りでのゲイ・レズビアンによる権利獲得運動との出会いであった。とりわけ、この3つめのサンフランシスコのカストロ通りでの同性愛解放運動との出会いによって、木谷麦子を含む参加者の一部は、日本では同性愛への認識が不足しており、これからもっと学ぶべきだという気付きを得ていた（以上、第1部）。

このアメリカ研修後、1988年には“人間と性”教育研究協議会に「同性愛プロジェクト」が組織される。この「同性愛プロジェクト」が組織された背景には、アメリカ研修での同性愛者との出会いが存在していた。アメリカ研修に参加した木谷麦子という一人の教師の性教育における人間観——これまで自身が行ってきた性教育で誰を見てきたのか——を問い直したのだ。その木谷が発起人となって、性教育における人間観の問い直しを進めていこうと同性愛プロジェクトが立ち上げられた。この同性愛プロジェクトを担った教師たちは、ジェンダー・セクシュアリティに関わる社会状況に気付いていく中で、同性愛者が差別されている状況の改善のために、教育という営みを用いようとした。しかし、アメリカ研修以降の感動と、善意に突き動かされるだけでは、むしろ差別の再生産にも加担してしまうということを、同性愛者からの指摘によって再度学びなおしている。そして、それを踏まえたうえで、同性愛者を捉えなおすのではなく、シスジェンダー・ヘテロセクシュアルという「マジョリティ」自身の立場性を捉えなおすことができるような教育実践を模索したのである。

同性愛プロジェクトを担ったかれらが執筆した『新しい風景』（1991）という冊子には、「異性愛を基盤に置いた従来の体系をそのままに、『同性を愛する人たちもいる』としたのでは、異性愛優位の発想に変わりはないことになります」という一言が残されている。この一言は、今日なされているLGBT教育への警鐘ともなっている。このような文章が、1991年という、今から30年ほど前にすでに提言されていたのだ。

この同性愛プロジェクトを担った教師たちは、このプロジェクトの発展解消後の1991年以降も、性教育実践の基盤に性の多様性をおいて実践を試みた。また、3者は、同性愛者以外の性的マイノリティとも繋がりながら、自分たちが作り上げた教育実践を練り直していった。同性愛プロジェクトは1991年以降の性教育実践において、少しずつ可視化されていく他の性的マイノリティを捉える素地を作り上げた。

本研究で明らかにしたことからもわかる通り、教師たちのおかれているジェンダー・セクシュアリティ史的状况に着目すること、そこでなされていた性教育において同性愛／同性愛者がどのように捉えられてきたのかに着目すること、そして現代日本性教育史研究で採用されていなかった、性教育実践者のライフヒストリーに着目するというこの3点によって、かれらが「性教育」と捉えていた、かれら自身の性教育実践が、どのようにして作り出されたのかという教師の課題意識が明確に示すことができただけでなく、本研究が着目した同性愛／同性愛者という人間のセクシュアリティに関する価値観と課題意識、そして教師の／としての立場性が変容していくことが描き出せた。ライフヒストリーに着目したことで、かれらが、同性愛者を認識していたのにもかかわらず、自身の性教育実践のベースに取り入れることができていなかった1987年のアメリカ研修以前と、それ以降、同性愛者と関わりな

がら自分自身のジェンダー・セクシュアリティ観を変容させていき、それを自身の性教育実践に反映させていく様相を描き出せたのだ。

この点に関わって、この方法枠組みを用いたことによって、教師の実践によって学校を変化させる可能性を持ち得ていること具体像を提示することができた。たとえそのような教育実践を妨げるような制度上の限界があったとしても、教師が子どもたちと関わる中で、子どもたちに性差別をしない主体として育ててほしいという課題意識から、教育実践を進めていくということが可能であっただけでなく、実際にそのような取り組みを担っていた人びとがいたことを示せた。このことは、改めて、教育実践における教師の主体性の重要性、課題意識を醸成させるための社会へのまなざしを育てることや、そのためにも、民間教育研究運動団体や、さまざまなマイノリティ運動といった学校外における学びあいの重要性を示すことにつながったと考える。

そして、この研究が、研究史的意義はもちろんのこと、教育運動における活動にも与える影響があると自負している。本研究が着目してきた「同性愛プロジェクト」という教師と同性愛者という性的マイノリティの関わり合いや、そこでの性教育実践、そして活動の成果は、研究史においてはもちろんのこと、JASEや性教協といった性教育運動団体においてもその価値が十分に評価されてこなかった。

本研究の成果は、性教育を担ってきた人びとが、自分たちが進めてきた活動を再確認することにつながるだけでなく、そこから学び得られる知見を今後の活動の指針を立てる上でも役立てることができると考える。日本において性教育実践が妨害されたり、教師の性教育実践を委縮させるような性教育バッシングが複数回起こってきた歴史を踏まえると、なによりも、教師の主体性が性教育の原動力となるということ、その背景にある教師の課題意識が問われるということを示すことができたと考えている。そして、研究者として実践者たちを支えるための理論の検討を進めることにも、本研究の成果は寄与できると考えている。このような意味において、本研究は、研究と運動との架橋になるという意義を持っている。

加えて、本研究が、同性愛者らの置かれている社会状況をとらえる際に、筆者が積み重ねてきた性的マイノリティ運動研究で得られた知見を用いたことで、性的マイノリティ運動と性教育運動との交差を描き出すことの糸口を見つけることができた。これらも性教育史はもちろんのこと、性的マイノリティ研究においても、先行研究では、十分になし得てこなかった点である。本研究の第I部において、筆者がこれまで研究を積み重ねてきた日本同性愛運動史研究の知見を加えたことによって、同性愛者と非・同性愛者とが結び付きながら性教育実践、同性愛運動が深められていった、その交差にあたる萌芽の時期が描き出せた。本研究は、このようなことが研究史的意義として提示できると考える。